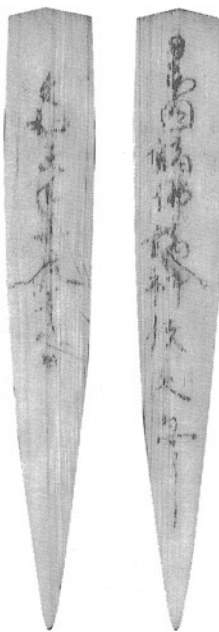




(2)



(2) 赤外線画像

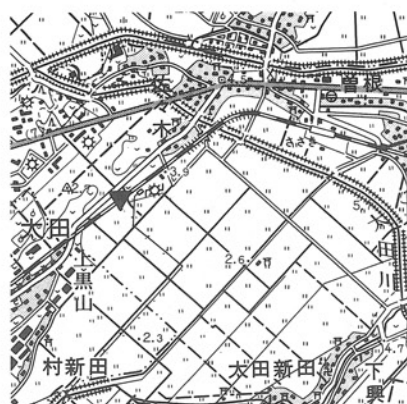


(1)



(1) 赤外線画像

四)の紀年銘を持ち、内容的には諸々の神仏を祭るものである。
本木簡の釈読・赤外線写真撮影は新潟大学の小林昌三氏・同大学
院生相沢史氏にご協力いただいた。
(丸山一昭)



(新発田)

本調査は、日本道路公団の日本海沿岸東北自動車道建設に伴うものである。調査対象地は新発田市の西部に当たり、JR白新線の南東に接している。一九五二―五六年の第二期鉄道建設で砂丘を削平した際に、縄文時代や平安時代の土器など遺物が多量に出土し、現在もそれらの遺物は保管されている。

新潟・馬見坂遺跡

うまみざか

- 1 所在地 新潟県新発田市大字佐々木中ノ割
- 2 調査期間 一九九九年(平11) 五月―一〇月
- 3 発掘機関 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 土橋由理子
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査を行なった地点は、遺跡の南側外縁部に該当するものと考えられる。遺跡の本体は、今回の調査対象地の北側にあり、本来の遺跡は、日本海に沿って形成された新潟砂丘の新砂丘Ⅰ-2と呼ばれている砂丘の南面に位置している。調査地点は砂丘間低地で、約六七〇㎡について調査を行なった。

本調査では縄文時代と平安時代の遺構が検出されたが、いずれも性格不明のものばかりだった。

ここで紹介する木簡は、新砂丘の内陸側で検出された自然流路内から出土したものである。この流路は調査対象地の東側から南西側に向かって流れ、かつては加治川水系の一支流をなしたとも考えられる。流路には、上流部から流れてきた土石流と推定される砂利層が堆積し、その中から摩滅した土師器・須恵器の多数の破片や、斎串・曲物底板などとともに、木簡が出土した。このような状況から、本木簡は周辺にあつた他遺跡から流れ込んだもので、直接的に本遺跡の性格を決めるものではない。

なお、土師器や須恵器の破片はいずれも細片で、詳細な時期判定は難しい。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ×□光如来過十二小劫授堅×
〔華カ〕 (127)×18×3 081

左右端は原形を留めているが、上下端は欠損している。下端は、

表面及び裏面から刃物を入れて切断されている。内容は『法華経』譬喻品第三の一部を書写したもので、「舍利仏。華光仏寿。十二小劫。除為王子。未作仏時。其国人民。寿八小劫。華光如来。過十二小劫。授堅満菩薩。阿耨多羅三藐三菩提記。告諸比丘」とある部分にあたる(『大正新脩大藏経』第九卷二一頁)。

なお、釈読にあたっては新潟大学の小林昌二氏からご教示を得た。

9 関係文献

〔財〕新潟県埋蔵文化財調査事業団『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成一一年度』(二〇〇〇年) (高橋 聡)

